

北 どころ

第123号 2026年6月1日（毎月1日発行）

木次線ストロール^{きすき}⑬

宍道駅^{しんじ}

「おしゃれな来待石の狛犬と 広大な干拓地の草原」

4月6日月曜日、先月号の絶景の旅⑨で雲南市の桜の名所を訪れた翌日である。松江市内の宿泊先を午前8時過ぎに車で出発、9時には南宍道駅に到着していた。金

山下公民館の敷地に駐車。広場の桜並木は満開だった。

早めに着いてしまったので、ホームの待合室のベンチで読書の時間。文庫本は旅の親友である。

ウグイスの鳴き声が聞こえていた。10時38分発の宍道行ききの列車に乗って驚いた。座席がほとんど埋まっていて、立っている人もかなりいる。高校生ぐらいの若者が多い。島根県の公立高校は8日が始業式、まだ春休みなのだ。旅行者もけっこういるので、青春18きっぷ（3月1日～4月10日）の

利用者かもしれない。山間の金山川と並走するように下った列車は、やがて国道54号線と合流して市街地に入ったが、沿線の建物に廃屋が目立つ。過疎化による地方都市の衰退は、全国規模の問題なのだろうが、廃屋好きのわたしには、その景色も魅力である。

6分程で宍道駅に到着。宍道駅は山陰本線の駅として明治42年（1909年）に開設された。簸上鉄道線（後の木次線）の接続駅になったのは大正5年。ホームが2つ、乗り場が3番線まであって、原則として1番線が山陰本線の松



ホームにはレトロな跨線橋が残っている



狛犬の爪が赤く塗られている

江方面で、2番線が出雲市方面。木次線が3番で（送電の）架線が張られていない。つまり、気動車（ジーゼル動車）専用の乗り場なのである。レトロな木造の跨線橋の階段を登って、駅舎のある1番ホームに降りた。備後庄原駅の跨線橋を思い浮かべた。昔ながらの跨線橋は、今では稀少である。改札で整理券を提示して運賃を精算、190円。改札を出る客は数人で、山陰本線への乗り換え客がほとんどなだらう。駅舎は平成29年（2017年）に改修されて、モダンな雰囲気。待合室のベンチにもかなりの人が坐っている。出入口の庇の柱に掲げられた「宍道駅」の古い看板、勇壮な墨痕が印象に残った。駅に隣接する郵便局の前にタヌキの石像がある。帽子を被って、差し上げた右手に乗っているのは伝書鳩だろうか。宍道町内には、こうした来待石製のタヌキの石像が60匹いるという。タヌキは福を呼ぶ縁起の良い動物で、語呂合わせで「他抜き」、他店よりも抜きんでるといふ商売繁盛の願いも込められている。来待石は、宍道湖の南岸（松江市宍道町の来待地区周辺）で採れる「凝灰質砂岩（ぎょうかいしつさがん）」、1400万年前の火山堆積物が海底に堆積して形成され



湖岸の亀の石像が2メートルも後退



干拓地の「昭和新田」の大草原

9号線に上がり、西に向か
って進むと護岸がある。宍道湖の反対側の土手には群生するハナダイコンの白い花が咲いていた。その西

側は、見渡す限りの大草原だ。通りかかったご老人に、この土地のことを尋ねた。「干拓して田んぼにした土地なんだが、うまくいかなくてな。今は牧草地として、どこかの牧場が管理しているはずだよ」

詠嘆するような口調だった。あとで調べると、宍道湖を全部干拓して農地にする計画があったようだ。政府の減田政策への転換と環境保護運動もあって、計画は途中で頓挫。干拓地の「昭和新田」という地名がどこか侘びしい。

旅行者にとっては、ただただ驚きの光景だった。町中からわずかな距離で、こんな大草原に出くわしたのである。潮風に吹かれるまま、しばらく見惚れていた。

町中に戻って、漁師町の風情が残る通りを宍道駅方面に向かった。観光パンフによると、国指定重要文化財の木幡家住宅があるはずだった。木幡家は、松江藩藩主の陣屋宿を勤めた名家である。

残念ながら、保存工事の最中で、建物の周囲には現場シートが張られている。貼り出されたパネルの「修理事業の概要」によると、事業期間は98ヶ月、完了予定は令和13年3月。5年後に再訪しようと思った。そのときは芸備線と木次線乗り継いで……、実現できることを心から願っている。

た。石質が均一で建材として利用され、加工がしやすいので石仏などの彫像、庭園石材、生活用具などにも幅広く使用されるようになっていった。来待石の歴史や文化を体験できる「モニユメント・ミュージアム来待ストーン」という施設があるが、最寄り駅が山陰本線の来待駅で、歩くには距離があまりすぎた。

ある。ちなみに「建」は勇猛「早」は迅速の意味で、「建早」は勇猛果敢な神の形容である。境内神社も多く、稲荷神社の参道には寄進された赤い鳥居が数多く連なっている。

古い町並みの路地を歩いて、宍道湖方面に向かう。国道9号線の手前に亀島神社がある。戦後になって宍道湖の沿岸沖に国道ができる前は、湖畔に突き出た景勝地だったという。湖面を渡る強風の桜吹雪の中、小ぢんまりとした社に参拝、主祭神は市杵島姫命。

国道の信号の横断歩道を渡ると、潜水道路に降りることが出来る。干拓事業のために造られたようだが、今は絶好の釣りポイントとなっている。長さは1〜1.5キロ、幅も広いので開放感がある。増水すると湖面が上昇して水没するので、潜水道路と呼ばれるようになった。

離れた場所に、2体の石像がある。ひとつはタヌキ、もうひとつは亀。2000年に来待石のPRのために設置された。2021年にミステリーが発生？

2トンはある亀の石像が、湖岸から2メートルも後退したのである。移動させた犯人は？ どうやら台風による荒波が原因らしいのだが、神の里なのでもしや、と思ってしまう。タヌキも亀も釣竿を握っていたはずなのだが、短い棒の先には小さな鯉のぼりがはためいている。広島カープ、頑張れ！

2トンはある亀の石像が、湖岸から2メートルも後退したのである。移動させた犯人は？ どうやら台風による荒波が原因らしいのだが、神の里なのでもしや、と思ってしまう。タヌキも亀も釣竿を握っていたはずなのだが、短い棒の先には小さな鯉のぼりがはためいている。広島カープ、頑張れ！

9号線に上がり、西に向かって進むと護岸がある。宍道湖の反対側の土手には群生するハナダイコンの白い花が咲いていた。その西側は、見渡す限りの大草原だ。通りかかったご老人に、この土地のことを尋ねた。「干拓して田んぼにした土地なんだが、うまくいかなくてな。今は牧草地として、どこかの牧場が管理しているはずだよ」

「菊屋の日記から」

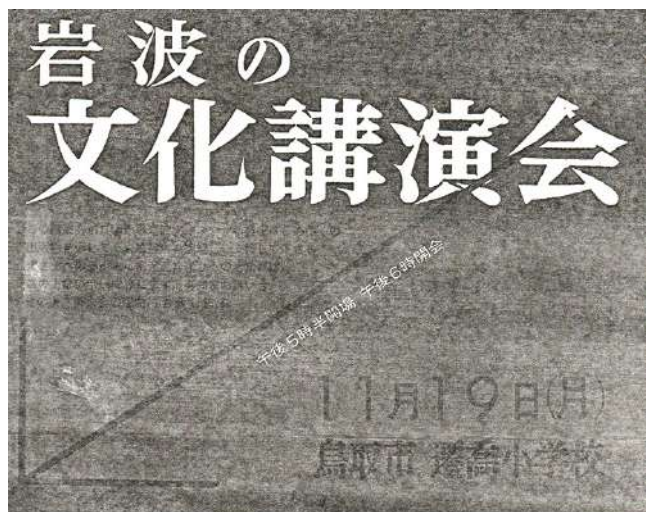
高柴順紀（菊栽培農家）

世の中が騒がしくなった。そのせいかどうか分からないが、ふと湯川秀樹博士のお話が浮かんでくる。

山陰の片田舎の大学へ進学した時のことである。文化的には遅れている感じの町で、学生生活を送るには期待外れではあったが、それでも年に数度は中央で活躍されている方々を招いての講演会などはあった。も

ちろん市民会館などもまだない時代で、小学校の講堂などが充てられていた。

1962年11月19日の日記に写真のようなピラがはせてあった。湯川先生が来られたのである。あやふやな記憶よりも、間違っているかもしれないがその日記を元に当時の思い出してみたい。



岩波映画作品
ともだち
湯川秀樹氏
現代科学者の責任
北杜夫氏
旅について
● 入場無料
★なお、御来場の方々には、読書家の道しるべ『100冊の本—岩波文庫より』『図書・11月号』等を贈呈いたします。

1962年の日記にはさんであったピラ

夕方6時からの講演に先立ち、朝10時半から学芸学部講堂で「最近の物理学」の講演があった。演壇に立たれて話されようとしたとき、スタッフの人が駆け寄り何かを告げたようだった。驚かれた様子で先生は話を始められた。

「いま、先日ニールス・ボーア博士が亡くなられたと聞かされた」が第一声であった。以下は話の要約である。

「1910年代のボーア、1920年代の量子力学、1930年代の原子核、素粒子が大きな山となって現代の物理学に発達してきた。この世界は物事が連続的に変化している、すなわち自然は飛躍しないとの考えはニュートン力学までであった。つまり人間とは自分たちの知っている範囲からの法則を捕まえることが出来、それが科学の進歩となって来た。ところが量子の世界は全く違っていた。前者の因果律はラプラスの悪魔の様に過去も未来も確定しているという考えに対して、後者は不確定であるという理論である。これに対し当初アインシュタインは神はサイコロをふらないと言って懐疑的だった。」

最初から聴衆が理解できる話ではなかった。最後の学長のお礼の言葉もとんちんかんだったと記している。

一方、小学校での講演「現代科学者の責任」は皆に分かるお話だった。しかしノーベル賞受賞という科学者としては最高の榮譽を与えられたとはいえ、苦悩する先生の姿が印象的であった。

「今までのように科学者はアカデミックな立場だけを取っていけば良いのであろうか。何かが分かれれば次にまた分らないことが生まれるという繰り返しが科学の進歩ではあったが、その分かったものが人の為になるかどうかは実際になってみないと分からない。幸か不幸かその影響がすばやく重要な結果となってしまうので、無責任にほってはおかれない。またすべきではないと思う。」

ボーアは原子模型やウラン核分裂における物理学の巨人ですが、彼に続く物理学者たちは戦争という状況下の中で原子爆弾開発に協力させられたのです。1950年代には原子爆弾を起爆剤とする水素爆弾まで誕生させてしまいました。ここでやっと核兵器廃絶に向かって世界の物理学者たちが叫び始め、その一人である湯川先生の講演を聞いたのはその時代だったということか。

しかし、今世界には約一万発の核兵器があるとか。

——進駐軍がいた町のはなし

出合いは不思議な贈り物 松岡初枝

人生で最初の出合いは、父母、祖父母、弟たち。これはもう運命というもので、私の大切な肉親との出合이었다。その後は幼稚園、小学校、中学校、高校や専門学校、その時々に出合いがあった。小学校まではクラス担任の先生との繋がりが強かつ



中学の学科担任の先生（右から2人目がY先生）

たのに比べると、中学からは教科担任の先生がそれぞれ異うので、先生によってその教科が好きになったり嫌になったりして一喜一憂したものだ。

中学二年の時、Y先生が国語の教科担任になってから、私は俄然国語が大好きになった。中学二年の国語は古文や漢文の分野の勉強が多くなったが、ここで嫌になる人も多かった。しかし私は古文や漢文にすっかり魅せられてしまった。中でも万葉集の授業の面白さは格別で、万葉集の中の有名歌は数多く暗記した。平家物語も同じで、教科書に出てくる数々のエピソードを全文覚えてしまった。文法も丸暗記した。「嫌だと思っても覚えるのよ！ きっと役立つからね」。こんなに精力的に勉強したのは、ひとえにY先生の授業が

楽しかったからだ。万葉びとの歌を説明する先生が、まるでその時代の人のようだったり、平家物語の男女の登場人物が教科書から飛び出して来るように感じた。私が文学好きになったのはこのY先生のおかげと言える。このY先生は学校新聞の顧問でもあった。私にとってこの出合いが人生の大きな糧となったのは間違いないと思う。

高校生の時に入った合唱団のM先生は、私の北海道行きの手助けを作ってくれた人だ。北の地の人々は学校で教えてくれない貴重な生活の知恵を伝えてくれた。特に食文化は埼玉とはかなりの異いがあった。北海道の人は市場で買った魚は基本的に自分で捌く。イカや魚の調理も上達した。今でも自分で魚を捌けるのはこの時のお陰だと思う。魚屋さんは「ソイや八角（はっかく）は刺身がいいよ！」「見た目が変な魚のほうがいいんだよ！」と言うが、まったくそのとおりだった。「おじさん、この間の魚おいしかった！」「東京のネエちゃん良かったな」。人はどこでも生活できるなあと思う事ばかりだった。

美容師になって家の美容室で仕事をしようになると、毎日のお客様

との会話の中からいろいろな人の生を知り、多くの勉強をさせて貰った。その中の数人は今も友達のようなつき合いをしているが、何でも話せる貴重な存在となっている。

埼玉県全域の美容室に品物を納めるデイルーの発案で、経営者の勉強会を作った。「如水（きさらぎ）会」と名づけてとても活発に活動をしてきた。八店舗ほどの会員の店の若いスタッフ達を集めて技術交流はもちろんのこと、年に数回、全く異なる分野の講師を招いての講演会はとも実り多い企画だった。デイルー社長のSさんは元プロ野球の選手だった人で、あらゆる分野に亘って顔が広い人だったので、講師の面々は多彩だった。

野球界からは山内一弘氏。「打撃の職人」と言われる人だっただけに、身ぶり手ぶりでの話は楽しかった。「今日のように若い女性ばかりの講演なんて初めてだよ。オジサンの話が退屈だったら眠ってもいいよ。」ところが話し始めたならその面白いこと、長嶋や王の失敗談、球場に来た観客のヤジに本気で腹を立てたり大笑いしたりのエピソード。球界ならではの話題でんこ盛りの熱演ぶりは、時が過ぎるのを忘れるほどだった。

雑誌『酒』の編集長だった佐々木久子さんは、NHK広島支局に勤務していた人で『酒』の編集や評論、随筆など多才の人で、「広島カープを優勝させる会」を作った人だったので、チャキチャキの広島愛に溢れる話に圧倒された。キリリと着た着物姿で「あなた達！ これからは女の時代なのよ。やろうと思っただ事には突き進みなさいネ！」。背筋の伸びた力強い人だった。

星製薬の社長、星氏は星薬科大学の理事もされていた人で、隈笹エキスや化粧品の話も精力的に語ってくれたが、何より心に残ったのはそのジェントルマンぶりだった。当時私が如水会会長をしていた三十代後半



中学生時の弁論大会

の頃で、講師紹介の後、社長がスツとスーツの上着を脱いだ。「お召し物お預りいたします」と預ったが、その素晴らしいこと。ダークスーツの裏地が赤のシルク、左胸には白バラが一輪刺繍してあった。「社長ステキ！ 英国屋さんでしょ？」。「わかる？」。「これじゃ銀座でモテますネ」「君、面白い子だね。今度連れてってあげる。名刺持つてる？」。なんと本当に銀座の高級クラブへ連れて行ってくれたのだ。四丁目の和光前で若い社員の方が待っていてくれた。クラブのママさんが「社長、若い女性をお連れなんて珍しいこと…」。「この人面白いのよ。ボクのこと銀座でモテるでしょなんて平気で言ってます。」



中山大三郎さんと娘と私

この物怖じしない所、気に入ったって訳さ！」。何てだったって銀座の一流クラブでの体験は一生に一度、日本の一流企業のトップ達の社交場をちよつと覗かせていただいた。こんな具合の講演会企画は大成功だったと言える。

メーカーのパーティーでお会いした小森和子さん、小森のおぼちゃまは「あーた、今年のドレスもいいワ、チャーミングよ！」。毎年の会話も楽しかった。ダンスは上手いし英語はペラペラ。外資系の会社の日本支社長とのダンス姿は絶品だった。

作詞家の中山大三郎氏にお会いした時は私の娘も一緒だった。「あなたもこの娘（こ）も笑顔がいいネ！」。恐

れ入ります。先生、どうしてあんな素晴らしい詞が書けるんですか？」。「うーん、多くの人と会い、本を読み、いろんな体験をすること、かな…」。早く亡くなられて残念だったが、心優しいおじさまだった。

深井阿児夫（あるぶ）先生は信州大学医学部の名誉教授で、メーカーの顧問、皮膚や薬品についてのレクチャーをしてくれる先生だった。この先生に気に入られた私は、いつも東京事務所へ押しかけて教えを請うた。「はっちゃん、仕事で他人に触れる職種は多くないんだよ。お客をよく観察する。マッサージの時はリンパ線に触る。そうすると変化に気づけるよ。病気を見つけれられる。早く病院に行くようアドバイスしなさいね。自分や家族が気づかない変化を見つけてあげてよ」「心します」「はっちゃん、一生を通じて他人の役に立つ人になりなさい」、今も深井先生の言葉を思いつつ仕事する日々なのだ。

先人との出会いは自分の人生に多くの力を与えてくれた。私にとって大きな贈り物だったと同時に、自分も次世代へのささやかな贈り物ができる人になりたいと思う。

「汚い足ねえ。ちゃんとお風呂に入ってる？」

シユーさんがきまり悪そうな顔をした。

「お湯をわかすのが面倒でな。アキラさんが早く温泉を作ってくればいいんだがな」

左足の親指の付け根を触った。

「腫れはもう引いてるわね。痛い？」

「少しだけ」

「薬を続けた方がいいわね」

副作用が起きていないかどうか確認したが、体調に問題はないようだった。用意しておいた薬を手渡した。越婢加朮湯（えっぴかじゅつとう）、ティーパックの中に六つの生薬が配合されている。これを土鍋で煎じる。鉄や銅、アルミの鍋は、成分が金属と反応してしまう可能性がある。600mlの水に30分ぐらい浸してから、弱火で水が半分ぐらいになるまでコトコト煮出す。これで完成、一日に三回に分けて、空腹時に服用する。

「お酒の飲み過ぎはだめだからね。とくにビールは、痛風になる原因の物質がたくさん入っているから控えよね」

渋い顔で頷いた。

「いつもタダで診てもらって悪いな」

「何言ってるの。報酬なんかもらったら、医師法違反ですぐに捕まるわよ」

本当は、こうした診察行為や投薬だけでもアウトである。シユーさんは健康保険料が未払いなので、病院に行けないのだ。

「江戸時代だったら良かったんだけどね。誰でも勝手に医者看板を掲げることができたの。あまりに医者が多くて、普段は閑古鳥が鳴いてる腕

「あれはツキヨタケ、発光成分があったて、月明かりで光るから、そんな名前でも呼ばれるようになったのね。去年の秋に収穫して塩漬けしておいたのを干してるの」

「うまそうだな」

「そう、おいしいの。でも、毒キノコよ」

シユーさんが驚いた顔をした。

万藤家の古い処方集に、徐福から伝承されたという仙薬がある。「蓬菜

いものには毒がある」

シユーさんの顔を見て笑った。

あどけない少女が、白い仔猫とじゃれている。十六歳だというが、もっと幼く見える。ファン・ジウ・ホアが名前だが、家族からはホアホアという愛称で呼ばれているという。一週間ほど前に、一枚の写真を手に赤水村にやって来た。

ラジカセをあげるという約束でおれの家に来ていた。日本語の勉強に役立つと思ったのだ。マコさんの診察に対するお礼もある。ラジカセは、リサイクルセンターで廃棄処分になるものを貰って来て、自分で修理した。

ホアホアの古い白黒写真には、おっぱ頭にモンペをはいた少女が写っている。背景は金屋子神社だろ。正面を向いた顔はきりりと引き締まっていて、勝気そうな眼をしている。誰かに似ていると思ったら、マコさんだ。写真の裏側には、「万藤美虎十三歳、赤水村にて」と毛筆で書かれている。美虎はミコと読むらしい。

マコさんの祖母の妹、つまり大叔母である。昭和十二年に二十歳で「満蒙青年開拓団」に親戚と一緒に参加、

徐福伝説2

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑪③

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

の悪い医者でも、風邪が流行ると忙しくなるから、『風で動く藪』と揶揄されて、藪医者と呼ばれるようになった……、という説もあるわね」

「マコさんは名医だよ」

お世辞の言えないシユーさんだから、素直に嬉しい。

「あれは、シイタケかい？」

窓際に簾のように、糸でくくったキノコが吊り下げている。



満州に入植するが、行方不明になってしまった。それが、馬賊の軍勢の中に、美虎の姿を見たという人物が現れたのだ。

馬賊は騎馬の一団で、もともとは地域の自衛のために組織されたが、国内の治安が悪化するにつれて力を持つようになり、個別に行動するようになった。敵対する相手には盗賊まがいのことも行っていたので、馬賊と呼ばれるようになった。美虎は男のような格好で、銃を手に馬を自在に乗りこなしていたという。報告を受けた親戚の者

は、人違いだろうと笑うしかなかった。戦後になっても、美虎が帰国することはなかった。

ホアホアは、その美虎さんの曾孫である。ホアホアの話によると、美虎が馬賊に入ったというのは本当で、頭目と結婚して夫婦で軍団を率いていたという。蒋介石の国民党に協力して中国の共産党軍と戦ったが、壊滅して美虎は二人の子供を連れてベトナムに逃れた。

ホアホアは、祖父から美虎の写真をもらって、自分のひい婆ちゃんの物語を聞いたのだ。そのとき初めて、自分の体の中に日本人の血が流れていることを知った。日本に対する憧れの気持ちが生えた。日本に行ってみたいという想いは強くなるばかりだった。

しかし、家が貧しく、海外旅行ができるような家庭ではなかった。それで一生懸命、アルバイトでお金を貯めて日本にやって来たのだが、赤水村を探しているうちに所持金が尽きてしまい、最後は飲まず食わずでヒッチハイクをしながらようやくここまで辿り着いた……、ホアホアはそう説明した。

未成年の少女を一人で、まともな旅費を持たせないで海外に送り出す

だろうか？ ビザのこともある。滞在許可日数を知りたいからビザ（査証）を見せてくれとアキラさんが伝えても、彼女は押し黙ったままだった。彼女が赤水村で心を許しているのは、わが家の仔猫だけだ。

「ネーム？」

ホアホアが尋ねた。おれはかぶりを振って、「まだないんだ」と答えた。不便を感じたことはない。名前で呼びかけなくてもよりそってくれる。名前を付けたら責任が重くなるような気がして、臆したのかもしれない。「名前をつけてよ」

仔猫を指さしてから、ホアホアに言った。彼女は日本語を理解している、わからない振りをしているような気がした。

「ゆき……、日本の白い雪」

そう言って仔猫の頭をやさしく撫でると、ゴロゴロと喉を鳴らした。そのとき、ドアをノックする音が響いた。すぐに、もっと乱暴にドアが叩かれた。

（誰だろうか？）

ドアを開けると、二人組の男が立っていた。スーツ姿だが、裏の世界の臭気を発散させている。かつてはおれもその住人だったので、すぐにわかった。（つづく）

まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の日は定休日でも開店、6月17日～20日は臨時休業。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週日・月・火曜日（2月は在庫整理で休業）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30（昼食休憩 12:00～12:30）

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第六部 旬と花を見る

今年の五月一日から三十一日は、旧暦では三月十五日から四月十五日です。

三月と四月の旬
たけのこ(筍・竹の子・笋)



太田道灌の山吹の逸話を描く(月岡芳年筆)

筍は広い意味ではイネ科のタケの若芽のことをさします。地表に出てきたときは、日に数センチずつしか成長していなかったものが、急に成長の速度を早めて、十日目くらいには数十センチから一メートルに達することもある、非常に成長の速い植物です。

「雨後の筍」ということばがあります。この季節に雨が降ると、次々に筍が生えてきます。転じていつせいに似たようなことが続いたり、物事が現れたりする様子を表すようになりました。

日本では筍は、古来から食べられており、『古事記』にも載っており、食物繊維が多く含まれ、新鮮な筍は生食や焼き物でも美味です。旨さを最大限に味わうためには、掘ってから一時間以内が目安と言われています。掘った直後からえぐみが増加するからです。

もつとも出回っている孟宗竹(もうそうだけ)という品種が春先の三

月中旬から、日本原産の真竹が五、六月に旬を迎えます。

かつお(鰹・松魚・堅魚)

鰹は世界中の温暖な海にいて、群れで回遊しながら小魚を食べて棲息しています。日本沿岸には黒潮に乗って北上し、初夏の頃に回遊して来るものを「初鰹」と呼んでいます。

鰹漁の歴史は古く『古事記』の中にも「堅魚」という名前が出ています。

江戸時代にはこの初鰹が大変珍重され「女房子供を質に出してでも食べ」と、言われたほどでした。また、秋になって親潮とともに南下するものを「戻り鰹」と呼びます。

鰹の干し物は献納品として重宝され、戦国時代にも縁起物とされていました。江戸時代になって燻製と麴(こうじかび)を使って保存性とうまみを増した干し物として開発されました。

いさぎ(鶏魚・伊佐木)

初夏の魚と言われます。黒の横筋が鮮やかですが、三十センチほどに成長すると、その模様が薄れてきます。十センチ程度のとき、猪の子供にたとえて「瓜坊(うりぼう)」と呼ばれ、刺身にすると大変おいしい。夏に向けて脂がのつてきて、塩焼きが最高です。

やまぶき(山吹)

晩春になると黄色の五弁花を咲かせる、バラ科ヤマブキ属の落葉低木です。似た品種で四弁の白山吹があるが、日本では岡山県にのみ自生しています。深い黄色の山吹色に似ていることから、江戸時代までは大判・小判のことを「山吹」と呼ぶこともありました。

山吹には、和歌から発した、太田道灌(どうかん)の有名な話があります。

ある雨の日、扇谷上杉家の家宰であった太田道灌は、鷹狩りにわかれ、雨に遭い、あばら家に駆け込むと少女が出てきました。道灌が、少女に蓑を貸してもらえないかと尋ねたところ、少女は黙って山吹の花一輪を差し出すだけ。道灌は怒って帰り、近臣の一人に話したところ、その者が『後拾遺集』の醍醐天皇の皇子の和歌に「七重八重花は咲けども山吹のみ(実)のひとつだになきぞかなしき」と言う歌があることを伝え、「その娘は蓑ひとつない貧しさを山吹にたとえたのではないでしょうか」と、言いました。

それを聞いた道灌は、己の不明を恥じ、この日を境に歌道に精進するようになったとのこと。

ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(21)

マック☆ヤマザキ

3月9日、アテネ（ギリシャ）。かつて、ギリシャは海運王国であった。船舶で世界に物資を輸送することで国に収益をもたらしていた。アリストテレス・ソクラテス・オナシスは船主として有名で、彼は葉巻とサングラス、美女を愛した。



スニオン岬にあるポセイドンの神殿（左）

ン夫人を妻にしたことで、日本でもよく知られている。彼の所有する船舶は、世界狭しと活躍した。かつて船員だった老人たちが、街角にたむろして昔話に花をさかせていた。

私が日本人と分かるや、「ヒロシマのクレ（呉）に立ち寄っていた」、「コーベ（神戸）で積み込んだ六甲の水はともおいしかった」と懐かしそうに話してくれた。

ギリシャ文明の象徴であるアクロポリスのパルテノン神殿は、紀元前432年に完成している。日本はそのころ縄文時代で、日本最古の寺、法隆寺は601年に建てられたので、その1033年も前に建てられたということになる。

海外に出る機会が増えて、最初に訪問したアメリカがすべてだと思いがあっていたが、ヨーロッパは奥が深いからよく勉強するようにと先輩からアドバイスをいただいた。パルテノン神殿を見ていると、そのとおりだと実感する。

日本では、木造の建物や橋等は火災や戦火で焼失して、建て替えられたものが多い。紀元前に建てられたアクロポリス（高い丘の上にある都市の意）のパルテノン神殿は、柱の一部が崩れたままの状態ではあるが、当時の姿が残っていて、訪れる人達を古代の世界にタイムスリップさせてくれる。世界遺産にも登録され、学生達には西洋文明の奥深さを強調して解説した。

今回の卒業旅行は、明日一日で幕を閉じようとしている。学生達が思い思いに町へ観光に、ショッピングに、そしてスニオン岬（※写真参照）へと出かけて行った。ギリシャ神話の「海の神」ポセイドンの神殿がこのアクロポリスの丘にあり、ホテルの近くのバス乗り場から、エーゲ海に沈んでいく夕陽を眺めることができる。

今年2回目の海外エスコート（添乗旅行）も、そろそろエンディングが近づいてきた。「添乗」の仕事と「舞台」の仕事はよく似ているといつも思う。幕が開いた時はぎこちなく、客の名前も分からず、私も学生達も動きが鈍い。しかし、だんだんと客の反応等がわかってくると、お互いが呼応して、観客席と舞台が一つに

なっていく。（私事だが、妻が舞台上で活躍していたので、そんな思いを強くした。）よい旅にはよいサービスイよいよ仕上げの段階である。

25日間というナガ〜い旅行で事故もなく、幕を閉じようとしている。“ファイナーレ”の舞台に相応しい「さよならディナー・パーティー」を思いつき、ホテル側と交渉した。いつもががらの食堂が、この日に限っては地方から来たサッカーチームの夕食会があるので、と断られた。しかし、この機会を逃すわけにはいかない。

そのサッカーチームの責任者に交渉してみてくれと頼み込んだ。トライしてみるので、責任者からOKの返事をもらった。ギリシャの人達を巻き込んだ、すばらしいファイナーレの舞台になりそうだ。一安心！

ホテルのロビーで、明朝の「エーゲ海クルーズ」の参加者募集と集金、さよならディナー・パーティーの参加者名簿作成と集金。その間も、冬場のアテネの疫病神である、車の煤煙が黒い影のようにパルテノン神殿を包みこんでいる。のどが痛い、寒気もする、でも、我々の旅行のゴールはすぐ近く……、風邪薬を飲んでもうひと踏ん張りだ！

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

大山の雪の映りし田を植うる

近藤 昌平

栗林奥の奥まで木下閣

原博己

春落葉朝の日課に路地を掃く

片岡 正人

雲の嶺見上げる農夫のため息よ

隆愚

半壊の巢建て直しをるつばくろめ

大槇 三代子

子供の日スマホあやつる指早し

寺内 龍二

鬼アザミ草刈り機の刃一閃す

赤川 冬人

寺山のうぐひす鳴きてうつらうつらに

松岡 初枝

陽の流れゆく時の間に間に

投稿&寄稿

候のことば

「菖蒲華」

隆愚

暦の二十四節気七十二候で六月二十六日から三十日頃を夏至の次候で「菖蒲華」（あやめはなさく）の候と

「菖蒲」は「あやめ」といいです。「アヤメ」は、外側の花の付け

も「しょうぶ」とも読みます。あやめは初夏に咲く美しい紫の花です。美しさの表現に、「いづれ菖蒲か杜若」といわれるように、かきつばたや花しょうぶと似ています

が、どこが違うのでしょうか。端午の節句に用いる「しょうぶ」

はサトイモ科の植物で、全く違います。「アヤメ」は、外側の花の付け

根に網目模様があり、葉は細目。梅雨入り前の五月下旬に咲きます。乾燥した陸地に生え、「ハナアヤメ」ともいいます。「目にもあやに」という程、美しい綾目（文目）模様で、「綾目」「文目」とも書きます。「ハナシヨウブ」は、花の付け根に黄色い筋があります。葉の表に一本、裏に一本のスジ、六月から七月中旬の梅雨の時期にさきます。湿った環境が好きで、「アヤメグサ」ともいいます。

「抜萃のつゞり」 片岡正人

前年一年間の新聞、雑誌、書籍などから、珠玉のエッセイやコラムを抜萃し、小冊子にまとめた「抜萃のつゞり その八十五」を、本年も送ってもらった。この小冊子は、1931年に熊平製作所の創始者・熊平源蔵さんが創刊した。心にしみる感動や喜びを多くの人に共感してもらい、社会貢献の思いをこめ、戦中戦後の三年間を除き一年一冊、号を重ねてきた。

今回は四十五万部を発行し、約六十カ国の日本大使館や総領事館をはじめ、諸官庁、金融機関、上場企業、学校、病院、図書館、ロータリークラブなど全国八万八千カ所の団体・個人に寄贈された。「はしがき」に記してある。その内容は七つの章に分類編集されている。

今号で特に記憶に残った一つは『三毛猫たま、愛すべき駅長』だった。今でこそ全国で猫の駅長は珍しくないが、三毛猫たまが駅長になった2007年当時は前代未聞だったという。発端は、和歌山県の南海電鉄で赤字路線の貴志川線を、新たに和歌山電鉄として復興するために、再生の決定打として選ばれたのが「三毛猫たま」だった。

凜とした猫駅長の誕生は大きな注目を集める。たまをひと目見ようと、国内外から人が押し寄せ、和歌山電鉄の利用者が急増する。たまの写真集やグッズが発売され、メディアにも繰り返し取り上げられた。

その後、たまが駅長の貴志駅は猫を模した猫耳付の駅舎に建て替えられたりした。また、地域活性化の原動力になり、「ネコノミクス」なる造語まで生まれる。改めて人と動物の素敵な共生に感じ入る。

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：6月20日(土) 9時30分～11時30分

テーマ：「少子化地域の小規模校

での心豊かな学びの可能性」

講師：田村富夫氏(西城振興区会長)

場所：交通交流施設1(JR庄原駅隣接)

参加費：500円

(学生200円、お茶菓子代込み)



申込み&問合せ：080-3631-9125(やない)

徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家(徳岡佛性坊)として多彩な
活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品
の展示販売を、どらくろあの一隅でしていま
す。

茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を
展示しています。あなたのお気に入りの逸
品が見つかるかもしれません。

※天井が低いので頭上注意!

どらくろあ 無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な地元産の野菜を店頭で販売
(値札のないものは百円均一)。

毎週水曜日の朝に入荷予定。

黒ニンニクの販売は諸事情にて終了いたしました。

「ぐんぐん伸びよう会」(教室：川西町241 連絡先：080-3631-9125 やない)



当教室では、一人ひとりに合った学習(ちょうどの学習)をし、**年齢・学年に関係なく、
生徒ができるところから始める学習法**です。**対象は、乳幼児～小学生。**

教室とご家庭との二人三脚で**子どものもっている可能性を伸ばしていきましょう。**無料体験受付中!!

0～3歳：4,000円(週1回)。4歳～小6生：算数+国語(4,500円、週1回)。お気軽にご連絡くださいね。

編集後記

◇木次線ストロール、
ようやく終点である
「宍道駅」にたどり着
きました。スタートし
たのが2023年10月
号、持病の腰痛の悪化
で他の企画でごまかす
ことも多く、2年4カ
月かかりました。次回で総集
編を掲載する予定です。
◇先月号の寄稿エッセイ「日
記」、木村兼華堂は木村兼葭
堂の間違い。「ハロー注意報」
の回数は⑨、「一、二、三、
四はハナ、ツ、セ、ネー」
でした。申し訳ありませんで
した。
◇腰痛の内視鏡手術のため一
週間入院予定。どらくろあは6
月17日～20日まで臨時休業し
ます。よろしくお願ひします。
◇今年も酷暑か……、無理せ
ずポチポチやりましょう。

発行：どらくろあ

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛: 九日市愛好会

第296回

くunchiichi しよばら九日市

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店&名産品で賑わっています。



6月9日(火)

9:00～13:00

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
6月8日（月）～10日（水）10時～15時
「花アート押し花作品展」

★とくし丸参上！（JA移動販売車）
※動くスーパーマーケットだよ

★HONMACHI STAND→コーヒー 100円引き

★キッチン北川・店頭販売（9:30開始）
※大好評の美味しいお惣菜がたくさん！

★どら書房、無料休憩室（漫画読み放題）
※本格コーヒー百円

★あなたも自分のお店を出してみませんか？（出店者募集中！）

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～
九日市愛好会事務局 FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10（楽笑座内）

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

